

徒然草



新潮日本古

A decorative border with floral motifs at the corners and a vine-like pattern with leaves and small flowers along the edges.

新潮日本古典集成

徒然草

木藤才藏 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第一〇回)
徒然草



定価一七〇〇円

昭和五十二年三月十日 発行
昭和六十年一月二十日 九刷

校注者 木 藤 才 藏

発行者 佐 藤 亮 一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行人 株式会社 新 潮 社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京03(二六〇五一一)(業務)
東京03(二六〇五四二)(編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐 多 芳 郎
組版 シーティエス大日本
製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Saizō Kidō, Printed in Japan, 1977.

ISBN4-10-620310-3 C0395

目次

凡例	一五
----	----

徒然草	一九
-----	----

解説	二五
----	----

付録（図録）	三七
--------	----

徒然草 細目

序 段	つれづれなるままに、日くらし、	徒然の所産	三
第一段	いでや、この世に生れては、	願望の数々	二
第二段	いにしへのひじりの御代の政をもわすれ、	儉約のすすめ	三
第三段	よろづにいみじくとも、色好まざらん男は、	色好みについて	四
第四段	後の世の事、心に忘れず、	仏の道うとからぬ	五
第五段	不幸に愁へに沈める人の、	配所の月	六
第六段	わが身のやんごとなからんにも、	子というものなくてありなん	七
第七段	あだし野の露消ゆる時なく、	世は定めなきこそいみじけれ	八
第八段	世の人の心まどはす事、色欲にはしかず。	色欲の魅力	九
第九段	女は髪をめてたからんこそ、	女の髪	一〇
第十段	家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、	住居について	一一
第十一段	神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、	柑子の木	一二
第十二段	おなじ心ならん人と、しめやかに物語して、	心の友	一三
第十三段	ひとり燈火のもとに文をひろげて、	見ぬ世の友	一四
第十四段	和歌こそなほをかきしものなれ。	昔の人の詠める歌	一五
第十五段	いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、	旅―家を離れる	一六
第十六段	神楽こそ、なまめかしく、おもしろけれ。	神楽・ものの音	一七
第十七段	山寺にかきこもりて、仏に仕うまつるこそ、	山寺に籠る	一八

第三十八段	名利につかはれて、閑かなる暇なく、	……	万事は皆非なり	毛
第三十九段	ある人、法然上人に、	……	法然の言葉	禿
第四十段	因幡国に、何の人道とかやいふ者の娘、	……	栗をのみ食う娘	𪛗
第四十一段	五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りに、	……	木の上で居眠りする法師	𪛗
第四十二段	唐橋中将といふ人の子に、行雅僧都とて、	……	行雅僧都の死	𪛗
第四十三段	春の暮つた、のどやかに艶なる空に、	……	書を読む男	𪛗
第四十四段	あやしの竹の編戸のうちより、いと若き男の、	……	笛を吹く男	𪛗
第四十五段	公世の二位のせうとに、良覚僧正と聞えしは、	……	榎木の僧正	𪛗
第四十六段	柳原の辺に、強盜法印と号する僧ありけり。	……	強盜の法印	𪛗
第四十七段	ある人、清水へ参りけるに、	……	清水へ参る尼	𪛗
第四十八段	光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、	……	光親卿有職の振舞のこと	𪛗
第四十九段	老来たりて、始めて道を行ぜんと待つことなかれ。	……	常に死を意識していよ	𪛗
第五十段	応長のころ、伊勢国より、女の鬼になりたるを、	……	鬼の虚言	𪛗
第五十一段	龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、	……	龜山殿の水車	𪛗
第五十二段	仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拝まざりければ、	……	山までは見ず	𪛗
第五十三段	これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、	……	三足のかなえ	𪛗
第五十四段	御室にいみじき児のありけるを、	……	御室のちご	𪛗
第五十五段	家の作りやうは、夏をむねとすべし。	……	家の作り様	𪛗
第五十六段	久しく隔りてあひたる人の、	……	話し方のよしあし	𪛗
第五十七段	人の語り出でたる歌物語の、	……	歌物語の歌のわるき	𪛗

- 第五十八段 道心あらば、住む所にしもよらじ。……………出家遁世の功德 七
- 第五十九段 大事を思ひ立たん人は、……………命は人を待つものかは 六
- 第六十段 真乘院に、盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。……………盛親僧都のこと 六
- 第六十一段 御産の時、飢落す事は、定まれる事にはあらず。……………御産の時、飢落すこと 六
- 第六十二段 延政門院、いときなくおはしましける時、……………ふたつ文字牛の角文字 六
- 第六十三段 後七日の阿闍梨、武者を集むる事、……………後七日の阿闍梨、武者を集むること 六
- 第六十四段 車の五緒は、必ず人によらず、……………車の五緒 六
- 第六十五段 このごろの冠は、昔よりは、はるかに高くなりたるなり。……………このごろの冠 六
- 第六十六段 岡本関白殿、盛りなる紅梅の枝に、……………花に鳥付くこと 六
- 第六十七段 賀茂の岩本・橋本は、業平・実方なり。……………賀茂の岩本・橋本 六
- 第六十八段 筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなる者のありけるが、……………大根の兵 六
- 第六十九段 書写の上人は、法華説誦の功……………書写の上人、六根淨にかなえること 六
- 第七十段 元応の清暑堂の御遊に、……………菊亭大臣、そくいを用意のこと 六
- 第七十一段 名を聞くより、やがて面影はおしはからるる……………我ばかりかく思うにや 六
- 第七十二段 賤しげなるもの。居たるあたりに調度の多き。……………賤しげなるもの 六
- 第七十三段 世に語り伝ふる事、まことはあいなきにや、……………虚言について 六
- 第七十四段 蟻のごとくに集まりて、東西に急ぎ、……………変化の理を知らぬ人々 六
- 第七十五段 つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。……………閑居生活の意義 六
- 第七十六段 世の覚え花やかなるあたりに、……………法師は人にうとくでありなん 六
- 第七十七段 世の中に、そのころ人のもてあつかひぐさに……………いろいろべきにはあらぬ人 六

- 第七十八段 今様の事どもの珍しきを、言ひ広めてなすこそ、……………話題について 七
- 第七十九段 何事も入りたぬさましたるぞよき。……………深く立ち入るべからず 八
- 第八十段 人ごとに、わが身にうとき事をのみぞ好める。……………武を好むべからず 九
- 第八十一段 屏風・障子などの絵も文字も、……………調度の趣味 九
- 第八十二段 うすものの表紙は、とく損ずるがわびしき……………不具なるこそよけれ 一〇
- 第八十三段 竹林院入道左大臣殿、太政大臣にさがり給はんに、……………元龍の悔 一〇
- 第八十四段 法頭三藏の、天竺に渡りて、……………優に情けありける三藏 一一
- 第八十五段 人の心すなほならねば、偽りなきにしもあらず。……………舜を学ぶは舜の徒 一二
- 第八十六段 惟継中納言は、風月の才に富める人なり。……………寺法師 一四
- 第八十七段 下部に酒飲ます事は、心すべきことなり。……………斬られた貝嘗房 一四
- 第八十八段 ある者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて……………小野道風筆和漢朗詠集のこと 一六
- 第八十九段 奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる……………猫また 一七
- 第九十段 大納言法印の召し使ひし乙鶴丸、……………頭をば見候わず 一八
- 第九十一段 赤舌日といふ事、陰陽道には沙汰なき事なり。……………吉凶は日によらず 一九
- 第九十二段 ある人、弓射ることを習ふに、……………二つの矢 二〇
- 第九十三段 牛を売る者あり。買ふ人、明日その値をやりて……………存命の喜び 二一
- 第九十四段 常磐井相国、出仕し給ひけるに、……………勅書を持つ者 二二
- 第九十五段 箱のくりかたに緒を付くる事、……………くりかたに緒を付くること 二三
- 第九十六段 めなもみといふ草あり。……………めなもみ 二四
- 第九十七段 その物につきて、その物を費し……………その物につきて、その物をそこなう物 二四

- 第九十八段 尊きひじりのいひ置きける事を書き付けて、……………一言芳談のことは 二五
- 第九十九段 堀川相国は、美男のたのしき人にて、……………堀川相国、過差を好むこと 二六
- 第百段 久我相国は、殿上にて水を召しけるに、……………まがりを参らせよ 二七
- 第百一段 ある人、任大臣の節会の内弁を勤められけるに、……………六位外記康綱 二七
- 第百二段 尹大納言光忠入道、追儼の上卿を勤められけるに、……………又五郎男 二八
- 第百三段 大覚寺殿にて、近習の人ども、……………わが朝の者とも見えぬ忠守 二九
- 第百四段 荒れたる宿の、人目なきに、女の、……………桂の木の家の女 二九
- 第百五段 北の屋かげに残りたる雪の、……………語り合う男女 三三
- 第百六段 高野証空上人、京へのぼりけるに、……………尊かりけるいさかい 三三
- 第百七段 女の物いひかけたる返事、……………女の本性 三三
- 第百八段 寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚かなるか。……………寸陰を惜しむべし 三五
- 第百九段 高名の木のぼりといひしをのこ、……………高名の木のぼり 三六
- 第百十段 双六の上手といひし人に、その手立を問ひ侍りしかば、……………双六の上手 三七
- 第百十一段 囲碁・双六好みて明かし暮らす人は、……………囲碁・双六にふけることの罪 三八
- 第百十二段 明日は遠国へおもむくべしと聞かんに、……………諸縁を放下すべき時 三九
- 第百十三段 四十にもあまりぬる人の、色めきたる方、……………聞きにくく見苦しきこと 四〇
- 第百十四段 今出川のお低い殿、嵯峨へおはしけるに、……………高名の養王丸 三三
- 第百十五段 宿河原といふ所にて、ぼろぼろ多く集まりて、……………ぼろぼろの決闘 三三
- 第百十六段 寺院の号、さらぬよろづの物にも、……………名のつけ方 三三
- 第百十七段 友とするにわろき者、七つあり。……………わろき友よき友 三四

第百十八段	鯉のあつもの食ひたる日は、鬻そそけずとなん。	鯉・雉・松茸・雁	二五
第百十九段	鎌倉の海に、かつをとといふ魚は、	かつお	二六
第百二十段	唐の物は、菓の外は、なくとも事欠くまじ。	唐の物	二六
第百二十一段	養ひ飼ふものには、馬・牛。	養ひ飼ふもの	二七
第百二十二段	人の才能は、文あきらかにして、	必要な教養と技術	二八
第百二十三段	無益のことをなして時を移すを、	最低生活必需品	二九
第百二十四段	是法法師は、浄土宗に恥ぢずといへども、	是法法師	三〇
第百二十五段	人におくれて四十九日の仏事に、	変なたとえ	三一
第百二十六段	ばくちの、負きはまりて、	ばくち	三二
第百二十七段	あらためて益なき事は、	あらためて益なきこと	三三
第百二十八段	雅房大納言は、才かしく、よき人にて、	慈悲の心	三四
第百二十九段	顔回は、志、人に勞を施さじとなり。	心をいたましむること	三五
第百三十段	物に争はず、おのれをまげて人にしたがひ、	争いを好む失	三六
第百三十一段	貧しき者は財をもて礼とし、	身の程を知れ	三七
第百三十二段	鳥羽の作道は、鳥羽殿建てられて後の号にはあらず。	鳥羽の作道	三八
第百三十三段	夜の御殿は東御枕なり。	東枕・南枕	三九
第百三十四段	高倉院の法華堂の三昧僧、	自分自身を知れ	四〇
第百三十五段	すべて、人に愛せられずして	人に愛されずして衆に交わるな	四一
第百三十六段	資季大納言人道とかや聞えける人、	むまのきつりやう	四二
第百三十七段	医師篤成、故法皇の御前にさぶらひて、	しおの字は土偏	四三

第三百七段 花はさかりに、月はくまなきをのみ、……………月・花の見方 一五

さやうの人の祭見しさま、……………祭の見方 一五

かの棧敷の前をこころ行き交ふ人の、……………無常のかたき 一六

第三百十八段 祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、……………後の葵・葉玉・菖蒲 一六

第三百十九段 家にありたき木は、松・桜。……………家にありたき木・草 一七

第四百十段 身死して財残る事は、……………死後に財産を残すな 一七

第四百十一段 悲田院堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、……………堯蓮上人のこと 一八

第四百十二段 心なしと見ゆる者も、よき一言いふものなり。……………恩愛の道と政治 一八

第四百十三段 人の終焉の有様のいみじかりし事など、……………人の終焉の有様 一九

第四百十四段 梶尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、……………阿字本不生 一九

第四百十五段 御隨身秦重躬、北面の下野入道信頼を、……………落馬の相 二〇

第四百十六段 明雲座主、相者にあひ給ひて、……………兵仗の難 二〇

第四百十七段 灸治、あまた所になりぬれば、……………灸治の跡 二〇

第四百十八段 四十以後の人、身に灸を加へて、……………三里の灸 二一

第四百十九段 鹿茸を鼻にあてて嗅ぐべからず。……………鹿茸 二一

第五百十段 能をつかんとする人、……………上手の中に交りて学べ 二二

第五百十一段 ある人のいはく、年五十になるまで上手に至らざらん芸をば……………老人の芸 二二

第五百十二段 西大寺靜然上人、腰かがまり、眉白く、……………むく犬——資朝の逸話(一) 二三

第五百十三段 為兼大納言入道召し捕られて、……………あな漢まし——資朝の逸話(二) 二三

第五百十四段 この人、東寺の門に雨宿り……………かたわ者たち——資朝の逸話(三) 二四

- 第一百五十五段 世にしたがはん人は、まづ機嫌を知るべし。……………死期はついでを待たず 一五
 第一百五十六段 大臣の大饗は、さるべき所を申しうけておこなふ、……………大臣の大饗 一五
 第一百五十七段 筆を執れば物書かれ、楽器を取れば音をたてんと……………心は事に触れて來たる 一五
 第一百五十八段 盃の底を捨つる事は、いかが心得たる……………凝当 一六
 第一百五十九段 みな結びといふは、糸を結び重ねたるが、……………みな結び 一七
 第一百六十段 門に額かくるを、打つといふはよからぬにや。……………言葉の使い方 一七
 第一百六十一段 花のさかりは、冬至より百五十日とも、……………花のさかり 一七
 第一百六十二段 遍照寺の承仕法師、池の鳥を日ごろ飼ひつけて、……………大雁を殺す法師 一七
 第一百六十三段 太衝の太の字、点打つ、打たずといふこと、……………太衝の太の字 一八
 第一百六十四段 世の人あひ会ふ時、暫くも黙止する事なし。……………無益の談話 一八
 第一百六十五段 あづまの人の、都の人に交はり、……………わが俗にあらずして人に交われる 一八
 第一百六十六段 人間の営みあへるわざを見るに、……………春の日の雪仏 一八
 第一百六十七段 一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろに臨みて、……………人と争うなかれ 一八
 第一百六十八段 年老いたる人の、一事すぐれたる才のありて、……………今は忘れにけり 一九
 第一百六十九段 何事の式といふ事は、後嵯峨の御代までは言はざりけるを、……………何事の式 一九
 第一百七十段 さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬ事なり。……………阮籍が青き眼 二〇
 第一百七十一段 貝をおほふ人の、我が前なるをばおきて、……………手もとを正せ 二〇
 第一百七十二段 若き時は、血気うちに余り、心、物に動きて、情欲多し。……………若人と老人 二〇
 第一百七十三段 小野小町が事、きはめてさだかならず。……………小野小町が事 二〇
 第一百七十四段 小鷹によき犬、大鷹に使ひぬれば、……………大につき小を捨つることわり 二〇

- 第一百七十五段 世には心得ぬ事の多きなり。……………飲酒の害 一八九
 かくうとましと思ふものなれど、……………酒の捨てがたさ 一九三
 第一百七十六段 黒戸は、小松御門位につかせ給ひて、……………黒戸 一九三
 第一百七十七段 鎌倉中書王にて御鞆ありけるに、……………乾き砂子 一九四
 第一百七十八段 ある所の侍ども、内侍所の御神楽を見て、……………別殿の行幸には扈御座の御剣 一九五
 第一百七十九段 入宋の沙門道眼上人、一切経を持来して、……………那蘭陀寺の大門 一九五
 第一百八十段 さぎちやうは、正月に打ちたる毬杖を、……………法成就の池にこそ 一九六
 第一百八十一段 ふれふれこゆき、たんばのこゆきといふこと、……………たんばのこゆき 一九七
 第一百八十二段 四条大納言隆親卿、乾鮭といふものを供御に……………鮭の白乾 一九七
 第一百八十三段 人つく牛をば角を切り、人くふ馬をば耳を切りて、……………律の禁ずるところ 一九八
 第一百八十四段 相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。……………障子の切り張り 一九八
 第一百八十五段 城陸奥守泰盛は、さうなき馬乗りなりけり。……………道を知る者 二〇〇
 第一百八十六段 吉田と申す馬乗りの申し侍りしは、……………乗馬の秘訣 二〇〇
 第一百八十七段 よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、……………慎めるは得のもと 二〇一
 第一百八十八段 ある者、子を法師になして、……………余事を捨てて大事を急げ―説経師のたとえ 二〇三
 たとへば、碁をうつ人、……………碁をうつ人 二〇三
 京に住む人、急ぎて東山に用ありて、……………―東山に行く人 二〇四
 一事を必ずなさんと思はば、……………―登蓮法師のこと 二〇四
 第一百八十九段 今日はその事をなさんと思へど、……………不定と心得ぬのみ、まことに違わず 二〇五
 第一百九十段 妻といふものこそ、をのこの持つまじきものなれ。……………妻は持つな 二〇六

第百九十一段	夜に入りて物のはえなしといふ人、いとくちをし。……夜のみこめてたけれ	二〇八
第百九十二段	神仏にも、人のまうでぬ日、……神仏に夜参る	二〇九
第百九十三段	くらき人の、人をはかりて、……文字の法師・暗証の禪師	二〇九
第百九十四段	達人の人を見る眼は、……虚言の受け取り方	二一〇
	愚者の中の戯れだに、……達人の明智	二一一
第百九十五段	ある人、久我繩手を通りけるに、……地蔵を洗う貴人	二一二
第百九十六段	東大寺の神輿、東寺の若宮より帰座の時、……社頭の警蹕	二一三
第百九十七段	諸寺の僧のみにあらず、定額の女孺といふ事、……定額の女孺	二一三
第百九十八段	揚名介に限らず、揚名目と言ふものもあり。……揚名目	二一四
第百九十九段	横川行宣法印が申し侍りしは、……唐土は呂の国	二一四
第二百段	呉竹は葉ほそく、河竹は葉ひろし。……呉竹と河竹	二一五
第二百一段	退凡・下乗の卒都婆、外なるは下乗、……退凡・下乗の卒都婆	二一五
第二百二段	十月を神無月と言ひて、神事にはばかりるべきよしは、……神無月	二一五
第二百三段	勅勘の所に較かくる作法、今はたえて、……勅勘の所に較かくる作法	二一六
第二百四段	犯人を答にて打つ時は、拷器に寄せて、……犯人を答にて打つ時	二一七
第二百五段	比叡山に、大師勧請の起請といふ事は、……起請文	二一七
第二百六段	徳大寺右大臣殿、檢非違使の、……浜床にのぼる牛―徳大寺実基の逸話―	二一八
第二百七段	龜山殿建てられんとて、……掘り捨てられた蛇―徳大寺実基の逸話―	二一九
第二百八段	經文などの紐を結ふに、……弘辨僧正のこと	二二〇
第二百九段	人の田を論ずる者、訴へに負けて、……僻事せんとてまかる者なれば	二二〇

第二百十段	喚子鳥は春のものなりとばかりいひて、		喚子鳥	三二
第二百十一段	よろづの事は頼むべからず。.....	寛大にして極まらざる時	三三	
第二百十二段	秋の月は、限りなくめでたきものなり。.....	秋の月	三三	
第二百十三段	御前の火炉に火をおく時は、火箸して		御前の火炉に火をおく時	三四
第二百十四段	想夫恋といふ楽は、女、男を恋ふる故の名にはあらず。.....	想夫恋・廻忽	三四	
第二百十五段	平宣時朝臣、老ののち、昔語りに、.....	小土器の味噌――北条時頼の話	三五	
第二百十六段	最明寺入道、鶴岡の社参のついでに、.....	足利の染物――北条時頼の話	三六	
第二百十七段	ある大福長者のいはく、人はよろづをさしおきて、.....	大欲は無欲に似たり	三七	
第二百十八段	狐は人に食ひつくものなり。堀川殿にて、.....	狐は人に食いつくもの	三九	
第二百十九段	四条黄門命ぜられてはいはく、.....	横笛の五の六	四〇	
第二百二十段	何事も辺土は賤しくかたくななれども、.....	天王寺の舞楽――鐘の声は黄鐘調	四三	
第二百二十一段	建治・弘安のころは、祭の日の放免のつけ物に、.....	放免のつけ物	四三	
第二百二十二段	竹谷乗願房、東二条院へ参られたりけるに、.....	光明真言・宝篋印陀羅尼	四三	
第二百二十三段	鶴の大臣殿は、童名たづ君なり。.....	鶴の大臣殿	四四	
第二百二十四段	陰陽師有宗入道、鎌倉より上りて、.....	畠につくり給え	四四	
第二百二十五段	多久資が申しけるは、通憲入道、舞の手の中に		白拍子の根元	四六
第二百二十六段	後鳥羽院の御時、信濃前司行長、.....	平家物語の作者	四六	
第二百二十七段	六時礼讃は、法然上人の弟子、安楽といひける僧、.....	六時礼讃・法事讃	三七	
第二百二十八段	千本の釈迦念仏は、文永のころ、.....	千本の釈迦念仏	三七	
第二百二十九段	よき細工は、少し鈍き刀を使ふといふ。.....	妙観が刀	三八	

- 第二百三十段 五条内裏には、妖物ありけり。……………未練の狐 三九
- 第二百三十一段 園の別当入道は、さうなき庖丁者なり。……………百日の鯉 二四〇
- 第二百三十二段 すべて、人は無智無能なるべきものなり。……………人は無智無能なるべきもの 二四二
- 第二百三十三段 よろづのとがあらじと思はば、……………難点のない行動 二四三
- 第二百三十四段 人の、物を問ひたるに、知らずしもあらじ、……………明瞭な言葉つかい 二四三
- 第二百三十五段 めしある家には、すずろなる人、……………虚空よく物をいる 二四四
- 第二百三十六段 丹波に出雲といふ所あり。……………背中あわせの獅子・狛犬 二四五
- 第二百三十七段 柳宮に据ゆる物は、縦さま・横さま、……………柳宮に据ゆる物 二四六
- 第二百三十八段 御隨身近友が自讃とて、七箇条書きとどめたる事あり。……………自讃の事七つ 二四七
- 第二百三十九段 八月十五日・九月十三日は、婁宿なり。……………婁宿 二五一
- 第二百四十段 しのかの浦の蟹の見るめも所せく、……………結婚について 二五三
- 第二百四十一段 望月のまどかなる事は、しばらくも住せず、やがて欠けぬ。……………所願皆妄想 二五三
- 第二百四十二段 とこしなへに違順につかはることは、……………欲望を捨てよ 二五五
- 第二百四十三段 八つになりし年、父に問ひていはく、……………仏はいかなるもの 二五六